

科学文法の説明、言語ゲームの理解 —チョムスキーとウィトゲンシュタイン—

広島大学大学院 柳 瀬 陽 介

0. はじめに

他の学問領域同様、言語研究もますます細分化され精緻化している。例えば、「英語学」と称されるもの一つとっても、そのすべての分野に通暁することは、はなはだ困難というものであろう。このような状況において、専門の言語学者でも英語学者でもない、教育実践家としての英語教師は、どのように言語研究にかかわってゆけばよいのだろうか。また英語教師はどこまで言語理論の知見を生徒に教えるべきなのだろうか。英語教育に携わる者と言語研究との関係に、ある程度の目安をたてておかないかぎり、教師教育、教授内容、教授方法に関する討論は当座しのぎか、流行を追うだけのものに過ぎなくなってしまうだろう。特定の言語研究の流行に英語教育が振り回されてしまう愚を、性懲りもなく繰り返してしまうことはもう避けたい。本論ではあくまでも英語教師——生徒の言語使用を可能にする援助者——と言語研究との関係について、チョムスキーとウィトゲンシュタインという対照的な言語研究を例にとって、考察するものである。だが、まずその際の準備として、「説明」と「理解」の違いについて簡単にまとめておきたい。

1. 説明と理解

一般にディルタイから始まったとされる「説明」と「理解」の区別¹⁾は、19世紀以降のヨーロッパ思想上の大問題であった。自然科学の「説明」に、ある者は人間研究の範を求めようとし、ある者は逆に自然科学に収束しえない人間は「理解」されるべきであるとして、精神科学の独自性を主張した。ここではその思想史²⁾を追う紙幅はないし、またなによりも私にその力量はないので、「説明」と「理解」の違いに関する一般的了解事項を確認し、以下の議論の礎石とする。

「説明」という言葉が「理解」と対比して使われるとき、一般に前者は、「なぜその事象が生じているのか、または生じたのか」という疑問に対して解答を与えることである、と考えられている。そして往々にして「説明」という言葉は科学的色彩を帯びる。(科学的)説明とは、ある事象Eを、条件C1, C2, ... Cmと法則L1, L2, ... Lnから推論することとされている³⁾。この「説明」理論をめぐる、本論で問題にしたいのは、説明者の位置づけについてである。一般に、科学的説明においては、説明は「客観的」とされ、説明者の主観は排除されていると考えられている。説明者は事象Eの世界から超越した外在的存在であり、彼の観察により、事象Eは「客観的」に説明されるとされている。説明者の視点はいわば(緩い意味で)超越的なのである。その超越的な視点ゆえに、説明の科学性、客観性、そして時には斉一性までが標榜されるわけである⁴⁾。

しかし、ここで気を付けておかなければいけないのは、ハンソン⁵⁾の理論負荷性のテーゼ以降、科学的説明の言明はその理論が背景にあるゆえに成立するものであり、決して急進的な論理実証主義者が考えたような唯一真正な科学言語があるわけでないことが強調されていることである。クーン⁶⁾に至れば、科学の「客観性」はその科学理論・方法・立場等を共有する科学パラダイムの中においてのみであるとされている。ハンソンやクーンの科学哲学は(科学的)説明をその特権的地位から引きずり降ろしたといえよう。

とはいえ、やはり説明と理解の差異は依然として残る。「理解(=わかる)」という言葉には、「説明は何度も聞いたのだけど、どうも理解できない。何度やってもできないし」といった日常語法からもわかるように、理解者の主観性⁷⁾・身体性⁸⁾・実践性⁹⁾が積極的に関与している。説明者が事象世界から外在的・超越的であるのとは対照的に、理解者は事象世界の営みに内在しており、実践的である。私たちは何かを理解しているとき、自然にその営みの中に組み込まれている。車の乗り方がわかっている人は、スムーズに車の流れにのって目的地まで到着するだろうし、日本語がわかっている人は、違和感なく日本語の営みに入って、軽口をとばしたりするだろう。しかし理解者がある事を理解しているからといって、その人が必ずしもそれについて説明できるわけではない。日本語「は」と「が」の違いを理解している人の中で、それらを説明できる人はむしろ例外だろう(また完全に説明し尽くせるものでもない)。ポラニー¹⁰⁾がいうように、私たちの理解は暗黙知(tacit knowledge)によって支えられているのである。私たちは自らが語れることよりはるかに多くのことを知っているともいえよう。

こうしてみると、説明は理解の一変種とか、またはその逆とかいうものではなく、両者は異なるカテゴリーに属するものだと考えるべきではあるまいか。説明をうけることと、理解することは異なることなのであり、必ずしも両者は同時に成立しない。

それでは、この説明と理解という対比からすれば、各種の言語研究はどのような位置づけにあるのだろうか。諸言語研究は、言語を説明することを目的とするのであろうか、それとも理解させることを主眼におくののだろうか。次節では、チョムスキーとウィトゲンシュタインという極めて対照的な言語論を取り上げることによって、言語研究について考え直してみたい。

2. チョムスキーとウィトゲンシュタイン

チョムスキー言語学が、その科学性の標榜¹¹⁾、徹底した形式化といった側面で、各種の言語研究の中でも、際だった存在であることには異論はなからう。私たちを取り込んでしまっているこの言語という錯綜体をおよそ研究対象とするには、なんらかの抽象化、観念化が必要である。ソシュールの共時的、通時的言語体系、ラング、パロールの抽象化にはじまり、phonology (phonemics), phoneticsにしてもsyntax, semantics, pragmaticsにせよすべてなんらかの抽象化、観念化の所産である。しかし、l-languageを対象とし、普遍文法の構築を目指す¹²⁾チョムスキーは、その観念化の徹底性において卓越している。ここではチョムスキー言語学をその観念性の徹底ゆえ、言語研究の最左翼と称してみたい。

チョムスキーにとっての言語(すなわちl-language)は時空を超越したものである。チョムスキーにとって、誰が、いつ、どこで、言語を発話したかというのは、問題ではなく、チョムスキーが、言語を有する人間に生得的にあると考える(普遍)文法が、彼の興味の中心なのである。彼の主目的は人間一般に経験以前に備わっているはずの言語の知識の解明であり、その意味で彼の言語学は超越論的(transcendental)である¹³⁾。彼の言語学には、個性を有した話者は存在せ

ず、超越論的主体が存在するだけである。

超越論的主体には、個性をもった他者としての聞き手は必要でない。なぜなら、その主体が超越論的であると設定した時点で、その主体は、あまねく（その言語を有する）人間一般にあてはまる「万人の私」¹⁴⁾ となってしまったからである。その主体の発話が言語を共有する人すべてに同じ意味をもつならば、どうして聞き手が必要となるだろう。こうしてチョムスキーの言語学は「万人の私」に共通する「客観的な真理」を追求する（古典的な意味での）「科学」となる。チョムスキーの言語研究は、言語研究の最左翼としての超越論的科学文法と特徴づけられよう。

そのチョムスキーと全く対照的なのがウィトゲンシュタインである。後期ウィトゲンシュタイン¹⁵⁾ は反超越論的・反形而上学的な見解を表明したと考えられる¹⁶⁾。彼は「言語を話すということが、一つの活動ないし生活様式の一部であることをはっきりさせる」（23：強調は原文。以下の引用においても同様）ために、「言語ゲーム」という用語を用い、言語使用の多様性を強調する。後期の『哲学探究』における彼は前期の『論理哲学論考』の時のように、言語の一般形式を追求することを断念する（65）。なぜならば、様々な言語ゲームをある形式で一般化しようとしても、「そのことによって、異なった言語ゲームが互いに近似するようになったわけではない」（24）からである。

それどころか、さらに進んでウィトゲンシュタインは、われわれが「Xとは何か」といった形で、あるものの「本質」を把握しようとするとき、われわれは「本質はわれわれには隠されている」と仮定し、本質に関する問いの答えは「一度に、いかなる将来の経験とも無関係に、与えるべきものだ」（92）と思い込んでいることを指摘する。彼は「Xとは何か」といった形而上学的問いの不毛性を説くのだ。彼は、ある語の意味にせよ、また諸言語ゲームにせよ、それらに共通の要素があると想定してしまうことを批判し、有名な「家族的類似性」（67）の考えを提唱する。一つの家族の構成員においては、彼ら特有の共通の特徴はなく、様々な類似性が重なり合い、交差し合っていることに、ある語の様々な意味のありようを譬えたのである。

たとえば、われわれが「ゲーム」と呼んでいる出来事を一度考察してみよ。盤ゲーム、カードゲーム、球戯、競技、等などのことである。何がこれらすべてに共通なのか。――「何か~~が~~それらに共通でなくてはならない、そうでなければ、それらを<ゲーム>とはいわない」などと言ってはならない。――それらすべてに何か共通なものがあるかどうか、見よ。――なぜなら、それらを注視すれば、すべてに共通なものは見ないだろうが、それらの類似性、関連性を見、しかもそれらの全系列を見るだろうからである。すでに述べたように、考えるな、見よ！（66）。

ウィトゲンシュタインは、ある「語」――その語の中には例えば「言語（の本質）」等という語も当然含まれる――の「意味」が外在的に把握されうるとは考えない。彼は、ある語の意味が、どこか言語の営みから超越したところで説明されるとはしない。彼はいう、「『意味』という語を利用する多くの場合に――これを利用するすべての場合ではないとしても――人はこの語を次のように説明することができる。すなわち、語の意味とは、言語内におけるその使用である、と」（43）。

このようにウィトゲンシュタインの見解は、非常に反説明／科学／形而上学的であり、ある意味では反哲学的とすらいえるものである¹⁷⁾。ウィトゲンシュタインは確かに言語学者ではない。彼の論考は言語学ではなく、言語哲学である。彼の言語哲学により、言語学的に新しい知見が発見されたわけでもない。彼の言語哲学は、ある意味で私たちに一歩も前に運んではくれない。しかし彼は常識の錯誤を取り払おうとした。彼は、言語は、人がその営みの中に内在し、実践的に参与することにより、明らかにされること、および言語は種々の人間の営みの交錯の所産であり、

それを一般化しようとする試みは困難であり、かつ実りが少ないことを、「言語ゲーム」という言葉に結実させた。この考えに従うならば、話者の発話は徹頭徹尾、それぞれの言語の営みの連関の中で理解されるべきである。後期ウィトゲンシュタインの言語哲学の中に超越論的主体はいない。ここにおいて主体は、それぞれの言語ゲームに実践的に参与する独自の存在であり、その主体の超越論的な任意の置換は不可能である。

ウィトゲンシュタインは、言語をあるがままにおこうとする。言語の営みを離れて、言語を説明しようとすることを批判する。言語ゲームは、最終的には説明することができず、ただ確認しうるにすぎない現象であり、それについては言語ゲームが演じられているとだけ言うるのである¹⁸⁾。彼の言語論は、私たちを、言語に関するメタ的言明から、言語使用の現実へと引きずり戻す。その保守性、現実性の徹底性ゆえに、ここではウィトゲンシュタインの内在的・実践的言語ゲーム論を言語研究の最右翼と称しておこう。

以上に概観したチョムスキーとウィトゲンシュタインの言語論の違いは、単に研究対象の違い（統語論と意味論）ではなく、そこには根本的な態度の違いがある。チョムスキーは、言語の一般的真理を超越論的に解明しようとする科学たらんとし、ウィトゲンシュタインは、言語を形而上学的高みから日常の私たちが言語を使っている用法へと連れ戻そうとする(116)。ウィトゲンシュタインの言語哲学は、言語の使用を基礎づけることなく、ただ記述するのみである(124)。

この両者の違いは、前節でやや極端に性格づけした「説明」と「理解」の違いに対応するように考えられる。チョムスキーの科学文法は、彼の考える本質的な言語に潜在する諸法則と、その発動の諸条件を「発見」¹⁹⁾して、文法性判断といった事象を説明しようとする。その説明理論はできるだけ多くの事象を、統一した枠組みで説明できることをもくろむため、説明者の視点は限りなく高みに昇ろうとする。その視点が超越論的高みにまで至り、人間言語のすべてをその視野に収めたと考えられたとき、チョムスキー言語学は人間の言語一般を基礎づける説明を与える完成された科学理論になると考えられている。

一方ウィトゲンシュタインは、そのような超越論的動機を禁欲し、日常の言語ゲームに実践的に参与し、理解することを第一に考える。無論、日常生活において、言語ゲームが円滑に進まず困惑してしまった人は説明を求めるが、その説明は本論の最初で性格づけた種類の説明とは異なる。そこで与えられる説明は、その人が適切に言語ゲームを遂行できる（すなわちあるその言語ゲームを理解する）契機となる限りにおいて有効な実践的説明であって、決してそれは科学的・超越論的説明ではない。

そもそも、科学的・超越論的にせよ、実践的にせよ、ある説明が理解の契機となることはあっても、それが理解を構成するのではない。また理解のすべてを一律に基礎づける唯一真正な究極の説明があるわけではない。ある言語、すなわちある言語ゲームの理解とは、結局はその言語ゲームに実践的に広い意味で参与することであり、その実践の根底について果てしなく説明を求めることはウィトゲンシュタインによれば、「錯誤」なのである(654)。

私が根拠づけの委細をつくしたのであれば、私は確固たる岩盤に達しているのであり、私の鋤はそりかえってしまう。そのとき私はこう言いたくなる、「自分はまさにこのように行動するのだ」と(217)。

この最左翼チョムスキーと最右翼ウィトゲンシュタインの間に様々な言語研究が位置づけられるだろう。一般に形式化を追求する研究は、私の比喻を続けるならば、左翼系（進歩派）で、記述に専念する研究は右翼系（保守派）となろう。モンタギュー文法は前者の、クワークらの文法や、辞書の意味記述は後者の好例であろう。決して、統語を扱えば進歩派で、意味を扱えば保守派というわけではない。談話分析や、語用論も形式化・抽象化を追求すれば進歩派と称されるべ

きだろうし、統語でも大江、久野といった視点動詞の研究²⁰⁾は言語使用の記述に即した保守派に属するといえるだろう。ただ、その大江の研究などを読んでも強く感じるのだが、一般に研究が「学問化」、「科学化」を目指すにつれ、研究は形式化・抽象化、すなわち私のいう左翼化・観念化が進む傾向にあるのではなかろうか。科学の粋としての人工知能が、時代の夢となっているこの現代において、多くの人がチョムスキーの「科学的」言語学が、言語研究の最先端だと考えて憧れるのも無理もないような気がする。しかし、実践家であることをやめられない英語教師はどう考えるべきなのだろう。また英語教師はウィトゲンシュタイン言語哲学をどう解釈すべきなのだろうか。

3. 英語教育と言語研究

チョムスキー言語学は、その形式化、観念化により、強力な説明力²¹⁾を得る。実際、地上のあらゆる言語を統一した理論で説明してしまおうとすることなど、考えてみれば気の遠くなるほど壮大な試みであり、そしてまた彼の理論の抽象力は私たちを魅惑する。しかし、その代償は理論から切り捨てられた部分の大きさであり、無矛盾性を維持するための、理論のスコラ的煩瑣性である。これは、チョムスキー理論自体が良いとか悪いとかの問題なのではない。ただチョムスキー言語学はこのような特徴をもつということである²²⁾。

そして、チョムスキー言語学は私たちが日常確固たるものとして疑いもなく依拠している「岩盤」の説明を試みる。チョムスキーの問題意識は、私たちが日頃全く当然としていることに光をあて、私たちは彼の知的鋭敏さに感嘆する。しかし知的鋭敏さは、必ずしも実生活における賢慮を意味しない。チョムスキーの説明はさらなる説明を要請し、理論の精緻化はますます進む。チョムスキー言語学は日常生活において問題となっていないことを問題とし、その問題を説明するための理論体系を構築しようとする。これはひとつの形而上学的な試みであり、それ自体の市民権は剝奪されるべきではない。しかし私たちが、言語学者ならぬ英語教師として、チョムスキー言語学を性格づけ、取捨選択することは必要である。

私が考えるに、英語教師にとってのチョムスキー言語学は、美術教師にとってのカント認識論のようなものではないだろうか。なるほど、人間の言語の知識にせよ、認識作用にせよ不思議なものである。根源的に考えてみることも価値のないことではなかろう。しかし、英語教師もしくは美術教師は、その前にやるべき事が沢山ある。教師は第一に実践家であるのだ。チョムスキー自身も再三再四言うように²³⁾、実践家は理論科学に多くを期待すべきではない。

もちろんチョムスキー言語学が初めて明らかにしてくれた部分的言語事実までも無視する必要はない。チョムスキー言語学によりはじめて非文法性の説明がつく事象もあろう。しかし忘れてはならないのは、その非文法性の問題とはチョムスキー言語学そのものが要請した問題であり、言語使用者の日常的困惑ではないことである。ウィトゲンシュタインはいう、「われわれが説明を要求するのは、その内容のためではなく、説明の形式のためである場合の往々にしてあることを想起せよ。われわれの（説明の）要求は建築的なものである。説明は、何も支えない見かけだけの蛇腹の一種なのだ」（217）。チョムスキー言語学の企ては、チョムスキーの形而上学的困惑が要求する形式にかなった説明体系の、壮大な「建築への意志」なのである。ある意味で生成文法は確かに「一歩すすんだ英文法」である。しかしその一歩が、英語教師にとって望ましい方向に踏み出された一歩であるかは疑わしい。チョムスキー言語学の説明は、日常の言語使用を援助しない。生徒の言語使用を可能にするための援助者としての英語教育者は、企てとしてのチョムス

キー言語学の誘惑には抗するべきではなかろうか。英語教育者は、その社会的役割に忠実たらんとすれば、チョムスキーのような超越論的な知的彷徨には、むしろ禁欲的な態度で臨むべきではないだろうか²⁴⁾。

とはいえ、言語事象の説明は全く言語の理解をもたさないのであろうか。ここで間違えてはいけないのは、説明は理解を構成しないことである。もちろん、説明――特に例示などによる実践的説明――は理解のきっかけとなることは多々ある。説明は、私たちの理解を阻害することが生じて、私たちの営みが円滑さを失ったときに、臨機応変に要請される²⁵⁾。だからといって、決して、説明が理解を基礎づけているわけではない²⁶⁾。説明は理解の論理的基盤であるわけではなく、むしろ理解――すなわち日常生活における実践――の方が、説明の有効性を決める土台なのである。理解があるところでは説明は必要とされない。理解が阻害されているところに説明は要請されるが、決して説明自体が理解を構成するわけではないのだ。説明と理解は異なるカテゴリーに属するのである。

確かにチョムスキー言語学は、私たちが例えば「言語の知識とは何か」という問いを発したときに欲しくなる「説明」をくれるような印象を与える。しかしウィトゲンシュタイン流にいうならば、そういった形而上学的問いをたて、説明を求めること自体が錯誤である。彼の後期哲学は、そういった形而上学的問題を設定してしまってもがく「ハエにハエ取り壺から脱出する道を示してやること」(309)を目的とした。正しく後ろを見さえすれば、出口は開けているのだ。少なくとも、言語学徒ならぬ英語教師は、形而上学的困惑を誘う問いに捕らわれてしまうことなく、英語教師にとっての「現実」を直視しなければならないのではなかろうか。

言語の理解こそが、言語使用につながるのである。説明の体系を構築したら、いつか言語理解・使用ができるようになるのではない。「でも、言語の知識がなければどうして言語が使用できるといえるのか。言語の知識の解明が第一だ」などと考えるはいけぬ。それはまさに形而上学的ハエ取り壺にとらえられていることなのだ。そうではなくて、日常の言語使用の必要にかられた人たちが、実生活の中で言語を理解し、理解されるなかで、いつのまにか言語を使えるようになっている現実を直視するべきである。言語教育に関する考察は、その基盤を、形而上学的困惑にではなく、この言語習得・使用の現実におくべきではなかろうか。――「考えるな、見よ！」

他方、ウィトゲンシュタイン言語哲学にしても、英語教師に言語に関する洞察は与えても(そしてその洞察はかなり深いものだとは私は考えているのだが)、個別言語としての英語の具体的な知見を別段増やしてくれるわけではない。言ってみるなら、ウィトゲンシュタイン言語哲学は、形而上学的困惑を避けることには成功しても、具体的にある外国語のテキストがわからずにいるという日常的困惑の解消とは無縁である。ある意味で、彼の哲学はごく当然のことを当然に語っているだけである。また、教師がウィトゲンシュタインを気取って、すべてのことに関して「これが生活形式なのだ。諸君、受け入れたまえ」とばかりに、説明を一切放棄すれば、私たちは彼を良い教師だとはいわないだろう。ウィトゲンシュタインを皮相に解釈してはならない。彼は、根拠づけの委細をつくした後にまで説明を求めることを錯誤としたのであって、別にあらゆる説明を無意味としたのではない。ウィトゲンシュタインの名前を出して、説明の試みすべてを嘲弄するのは愚かであり、誤りである。ウィトゲンシュタインは英語教師を説明の義務から全く解放し、安心立命を与えてくれるわけではない。

英語教師は、チョムスキーにもウィトゲンシュタインにも救世主を見ることはできない。チョムスキーのように超越論的説明体系の構築を追求することが、言語学者ならぬ英語教師にとっての錯誤なら、ウィトゲンシュタインを皮相に解釈して、あらゆる説明を拒否するのは、単なる素人の英語話者ならぬ英語教師にとっては怠慢ではなかろうか。英語教師は、両者を視野の片

隅に入れつつも、両極端に片寄ることなく、自らの道を歩まなければならない。

それでは英語教師が頼れるのは、やはり伝統的な文法書であり、辞書であり、風物誌なのであろうか。答えはyesであり、noでもある。Yesというのは、私のいう進歩的な言語研究は、日常生活ではあまり考えない（形而上学的な）困惑に対してのみ有効だからである。外国語の本のある一節がわからないという日常の困惑を救うのは科学文法ではなくやはり伝統文法であり²⁷⁾、辞書であろう。英語教師は超越論の高みに昇り言語一般を説明する必要はない。伝統文法らが与えてくれる「展望」²⁸⁾が英語教師にとって必要にして十分なものではなからうか。

だからといって伝統文法と辞書の説明こそが言語理解、ひいては言語使用をもたらすと考える錯誤に陥ってはいけぬ。それが先ほどのnoの意味である。私は伝統文法を手放して礼賛しているのではない²⁹⁾。いくら伝統文法でも、初学者に隅から隅まで「体系的・無矛盾の」に教えようとするならば、初学者は文法の体系性・無矛盾性が要請する複雑さに圧倒されてしまうことは周知の通りである。本論の主張は、「説明」というものは（主観的・身体的・実践的な）「理解」の契機となる限りにおいて有効であるということである。生徒に与える説明が臨機応変の細切れであっても一向に構わないと考える。（もちろん教師は自分では文法を体系的にものしておくべきだろう。さもないと、臨機応変であるはずの説明は、その場しのぎのいいのがれになり、後々の混乱を招くだろう。教師が知っているべきことと、教えるべきことがいつも一致するわけではない）。

初学者に無矛盾的な文法体系を一度に教え込もうとするのは、場違いであり、不親切であるのではなからうか。譬えてみるならば、土地勘のない新参者に、町の説明を乞われたならば、人は当座の目的にかなった略図を書いて指図するか、実際にその人を様々な場所に連れてゆくだろう。こちらの方が正確ですから、といって国土地理院の2万5千分の1の一般図を、その地図記号の読み方の解説からはじめて、東西南北の隅から隅まで説明しようとする人は、果してその新参者に対して親切なのだろうか。地図という超越的な視座からの眺めがいつも万能であるわけではない。

伝統文法教授を言語教育の主眼とするのは、文法書と辞書を完全暗記することによって、ドイツ語を習得しようとしたといわれるグワンの貴重な失敗から何も学ばないものである。言語を話すということは、生活の営みの一部であるというウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の考えを思い出さねばならない。非言語的とされる風物誌的(ethnomethodological)な記述も英語教師にとって必要である。（先ほどの新参者が日本の風習に慣れない外国人だったら、親切な人は、場所を教えるだけでなく、その外国人に必要な様々な生活のやり方を、説明・実演し、一緒にやってみることを勧めるだろう）。そして、なによりも忘れてはならないのは、言語は、本來說明されるものというよりは、生活の営みの中で実践的に理解され、使用されるものであるということだ。私たちは言語の営みに棲まう。英語教師に、そして生徒に必要なのは、様々な英語の言語ゲームの「体得」である。説明は言語ゲームの体得を促す意味においてのみ価値があるのではなからうか。優先されるべきは言語の営みに実践的に参与することであり、文法書や辞書による説明ではない。

言語に関する諸科学の発展にはめざましいものがある。チョムスキー言語学をおそらく筆頭として言語諸科学はますます洗練化してゆく。しかしその諸科学の発展と、英語教育の実践について考える英語教育学の発展が必ずしも歩調を同じくしないことを自覚するべきではないだろうか。英語教育学の見かけ上の「科学化」がひょっとしたら英語教育学の退歩であるかもしれないという疑いを私は持ち続けたい。

英語教育学を基礎づけるものがあるとすれば、それは理論科学ではないと私は考える。英語教育学の基礎はあくまでも実践としての英語教育のではなからうか。英語教師の力量をつけるのは、

結局英語教師の直面する英語使用・英語教授の現実であろう。諸言語研究は、英語教育の現実からの問題意識に答える限りにおいて、はじめて英語教師に洞察を与えるのであって、諸言語研究への無批判な追従が英語教育を発展させるのではない。英語教師は諸言語研究の進展――ことに科学的言語研究のそれ――に右顧左眄する必要はない。科学的言語研究にいたずらに憧れて、教育の現実をおろそかにするのは、英語教師にとって賢明なことではなからう。現実的でない実践家は滑稽である。

註

1) 説明と理解の二分法を最初に導入したのはドイツの歴史家であり哲学者でもあるドロイゼンであり、彼は自然科学の目的は説明することであり、歴史学の目的はその学問領域に入ってくる事象を理解するだとした。ディルタイは、理解という方法が適用されるべき学問領域の全体を精神科学(Geisteswissenschaften)として体系づけたとされている。(G. H. フォン・ウリクト著、丸山高司・木岡伸夫訳『説明と理解』1971年/1984年訳刊、産業図書、7ページの記述による。)

2) この思想史の流れは、例えば丸山高司『人間科学の方法論争』1985年、劉草書房を参照されたい。なお科学哲学については、村上陽一郎の一連の著作、例えば『科学と日常性の文脈』(1979年、海鳴社)や、「説明・記述・理解」(『新岩波講座 哲学3 記号 論理 メタファー』1986年所収)などを参考にした。また、前・後期のウィトゲンシュタインを広義の「分析哲学」の枠組みでとらえ、それぞれの哲学における「理解」を論考したアーベルの「『言語分析的』哲学の展開と『精神科学』の問題」(竹内明弘編『分析哲学の根本問題』晃洋書房、1985年、所収)には、精神科学における理解についての示唆を受けた。

3) 『哲学事典』1971年、平凡社、835ページの記述による。なおここに述べられている見解は科学哲学者ヘンベルのものである。

4) 例えば急進的な論理実証主義者達は、「統一科学」を提唱し、諸科学は時間・空間・事物を基礎とする物理言語に基づくべきだと考えた。なお、チョムスキーも、言語研究も究極的には言語知識の物理的機構(physical mechanisms)を同定する脳科学へとつながってゆくべきだとする(例えばN. Chomsky Language and Problems of Knowledge 1988, MIT Press, Ch.1)点においてこの統一科学の系譜に属すると私は考える。

5) N. R. ハンソン著、村上陽一郎訳『科学的発見のパターン』1958年/1986年訳刊、講談社学術文庫。

6) トーマス・クーン著、中山茂訳『科学革命の構造』1962年/1971年訳刊、みすず書房。

7) 筆者は拙論『<視線>の交絡、<態度>の共変――テキスト理解への一アプローチ』において、理解の必要条件として、<視線>と<態度>、すなわち主観性が関与することを論証した。なお言語(理解)の主観性については時枝誠記『国語学原論』1941年、岩波書店、及び尼ヶ崎彬『ことばと身体』1990年、劉草書房を参照されたい。

8) 理解の身体性については、尼ヶ崎の前掲書、『岩波講座 教育の方法 8 からだと教育』1987年、岩波書店、佐々木正人『からだ：認識の原点』1987年、東京大学出版会、野村幸正『知の体得』1989年、福村出版、および佐伯胖・佐々木正人『アクティブ・マインド』1990年、東京大学出版会、などを参照されたい。

9) 理解の実践性に関しては後述するウィトゲンシュタインの著作およびG. ライル著、坂本百大

他訳『心概念』（1949年/1987年訳刊、みすず書房）を参照されたい。

10) マイケル・ボラニー著、佐藤敬三訳『暗黙知の次元』1966年/1980年訳刊、紀ノ国屋書店。

11) 例えば Chomsky, Generative Grammar 1988, Kyoto University of Foreign Studies p.1.

12) N. Chomsky, Knowledge of Language 1986, Praeger.

13) 「超越論的」(transzendental/transcendental)（「先験的」と訳されることもある）とは、人間が「一般に対象を認識する仕方——それがア・プリオリに可能である限り、——に関する一切の認識」（カント『純粹理性批判』B25）、すなわち「人間一般に先天的に備わっている認識機構に関する」、といった意味である。言語習得・使用を可能にしている生得文法の解明という点で、チョムスキー言語学と、カント超越論的認識論は通底していると考えられる。実際、チョムスキー自身も、哲学者ブライアン・マギーとの対談の中で、自分の言語学がカントのしていたことを現代言語学の用語を使って再構成していることを認めている（ブライアン・マギー編、磯野友彦訳『哲学の現在』1978年/1983年訳刊、河出書房新社、255ページ）。また、『言語と精神』（チョムスキー著、川本茂雄訳1972年/1980年訳刊、河出書房新社、142ページ）においても、文法獲得のための「生得的な制限は言語経験のための、カントの意味における、先行条件」であるという主張がある。とはいえカントとチョムスキーの見解が全く一致しているわけではない。例えば『ことばと認識』（チョムスキー著、井上和子他訳、1980年/1984年訳刊327-328ページ）を参照せよ。

14) 柄谷行人（『隠喩としての建築』1983年、『探究Ⅰ』1986年、『探究Ⅱ』1989年、いずれも講談社）のウィトゲンシュタイン読解、および「独我論」や「モノローグ」の考えには大きな示唆を得た。

15) 以下、本文および註で記載される番号は、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』（藤本隆志訳、1953年/1976年訳刊）の節番号を示す。なお訳文は基本的には上掲書に従ったものの、一部は Suhrkamp社の全集による独文（原文）、およびBlackwell社の英訳を参照しながら、改訳してある。

16) 本論で私は後期ウィトゲンシュタインは反超越論者であるという見解をとっている。たしかにウィトゲンシュタイン後期哲学も、経験の基盤、根拠に関わるという意味では、超越論的といえるのかもしれないが、ウィトゲンシュタインはカント（やチョムスキー）のように、超越論的認識主体・機構の積極的解明をはかっているのではなく、むしろ私たちの経験の基盤、根拠は「受け入れられるべきもの、与えられているもの」(vi)、あるいは「原現象」(654)であり、説明を求めるべきではないものとしている。彼によれば、「超越論的」なるものは実践的行動において依拠されてるという形で、せいぜい示されるのみである。この意味で、後期ウィトゲンシュタイン哲学は、せいぜいもって逆説的超越論的哲学と称せられるぐらいで、むしろ私は反超越論的と呼ぶべきだと考えている。

またアーベルのように「人間の生活形式を理解するための可能性と妥当性の条件として」、「理想的（無限界の）コミュニケーション共同体の理想的言語ゲーム（＝超越論的言語ゲーム）」を要請しなければならない（カール・オットー・アーベル著、磯江景孜訳『哲学の変換』1972年/1986年訳刊、二玄社、42ページ）と考えるのは、まさに形而上学的な要請であり、本論のように言語教育実践に関する論考ではこのような要請は必要とされない。

なおウィトゲンシュタインの超越論的解釈についての諸論に関しては、岡本由起子+野家啓一「ウィトゲンシュタインと超越論的哲学」（『現代思想 臨時増刊：総特集ウィトゲンシュタイン』1985年、青土社、所収）、古田裕清「超越論的なるものを巡って」（『理想 特集＝ハイデガーとウィトゲンシュタイン』1989年、理想社、所収）を参照せよ。

17) ワルター・シュルツ著、金子昌弘訳『哲学の否定——ウィトゲンシュタイン』1967年/1980

年訳刊、二玄社。

18)上掲書、152ページ

19)ウィトゲンシュタイン的な考え方からすれば、これは「発見」ではなく「発明」であることになる。

20)大江三郎『日英語の比較研究——主観性をめぐって』1975年、南雲堂。久野暁『談話の文法』1978年、大修館書店。

21)チョムスキーの言葉を借りるならば、普遍文法による説明は、個別文法による記述的妥当性(descriptive adequacy)よりも深い説明的妥当性(explanatory adequacy)を有するということになる。(チョムスキー著、川本茂雄訳『言語と精神』1972年/1980年訳刊、河出書房新社、51ページ)。

22)チョムスキー言語学の物理(還元)主義および生得論の主張などに関しては後日もう少し詳しい形で論考してみたい。

23)例えば、N. Chomsky Language and Problems of Knowledge 1988, MIT Press, p.180.

24)本論ではチョムスキーばかりが英語教育にとっての「誘惑」として挙げられているが、私は英語教育に携わる者は、他にも人間の認知活動のすべてを可知と想定する認知科学あるいは人工知能の企てには批判的である必要があると考えている。部分的な科学的知見の集積によって、いつかは人間の認知行動の全容がつかめると考えるのはいささか素朴過ぎるのではあるまいか。あるいはチョムスキー言語学より、こういった無批判的な科学信仰の方がむしろ警戒されるべきなのかもしれない。この点においてチョムスキーは——物理還元主義は別とするならば——健全な見解を表明しているようである。彼は人間言語の研究には、私たちの扱いうる問題である「課題」と、おそらく私たちの手に余る問題であろう「謎」があるとして、人間がどのように(創造的に)話すかといった問題は後者に属するとしている。(例えば、チョムスキー著、井上和子他訳、『言語論』1975年/1979年訳刊、大修館書店、第4章を参照せよ)

ボラニー(前掲書、58ページ以降)がいうように、「上位レベルの働きは、下位レベルを構成している諸細目を支配する法則によっては説明され得ない。例えば、語彙は音韻論から導くことができない。言語の文法は語彙から導くことができない。文法の正しい使用は、良い文体である理由を説明しつくすことはない。そして良い文体が詩の内容を与えるわけではない」のである。というより、上位レベルからの洞察がなければ、下位レベルの研究は成立すらないといえる(例えば、「意味」を導入しなければ音韻論は成立しない)。認知心理学研究においても、例えば統語解析の知見がいくら集積されようとも、それから人がどうそのテキストに意味を見いだしたかは導出されない。むしろ逆にテキスト理解といった上位レベルの洞察から、統語解析といった下位レベルの研究の発展があるといえるのではあるまいか。部分を集積すればいつかは全体が見えてくるとして、(認知)科学の部分知を使ってボトムアップ的に教育方法の構築を考える英語教育学の構想は、いささかドン・キホーテ的ではなからうか。

誤解を避けるために付け加えておくが、無論私はすべての科学研究が英語教育に対して無意味だなどという単純な議論を呈しているのではない。私が言っているのは、英語教育は、科学に基礎づけられることはないということである。「科学的」英語教育学研究に対する批判は、拙論「英語教育と知のあり方——あるいは、なぜ『科学的』英語教育学を批判するのか——」(未公刊)を御参照頂きたい。また、認知科学・人工知能の批判については、Modularity of Mind (J. Fodor, 1983, MIT Press, フォーダー『精神のモジュール形式』伊藤笏康・信原幸弘訳、1985訳刊、産業図書)、『純粹人工知能批判』(ドレイファス、ドレイファス著、椋田直子訳、1987年訳刊、アスキー出版局)、『コンピュータと認知を理解する』(ウィノグラード、フローレ

ス著、平賀謙訳、1986年/1989年訳刊、産業図書）等を参照されたい。

25)O. F. ボルノー著、高橋義人訳『ディルタイとフッサール』1986年/1986年訳刊、岩波書店、148ページ。

26)外国語教育に携わる者にとって、ここで思い出されるのがクラッシュェンである。周知のように彼は、learningとacquisitionを区別しようとしたが、その区別は不十分なもので、彼の論はやや神秘的な疑似心理理論になってしまった。彼のlearningとacquisitionの区別は、本論の説明と理解の区別に近いと考えられるが、それらを、それぞれexplicit knowledgeとimplicit knowledgeという2種類の知識の変種として並列的に考えて、議論を「心」の中に閉じ込めてしまった、彼および彼以降の論は、説明と理解を峻別する本論の議論からすれば批判されるべきである。

27)渡部昇一（例えば、『秘術としての文法』、1988年、講談社学術文庫）も、伝統文法の実用性を高く評価しているが、私は彼のように伝統文法を「秘術」とも「魔法」とも警えるつもりはない。

28)ウィトゲンシュタイン、122節の言葉。解説を加えておこならば、「展望を持つ」とは、物事を実践の連関において見るということである。「説明」の見方が解剖学的な見方だとすれば、「展望」は生態学的な見方だといえるだろう。（山本信・黒崎宏編、『ウィトゲンシュタイン小事典』1987年、大修館書店、194ページ）。

29)教育実践における伝統文法の果たす役割については拙稿「書換えとパラフレーズ」『英語教育研究』1991年第34号を参照されたい。